

第八節 沖永良部と倭寇

「世之主時代（一三五五〜一四一六年）黄美留村に扇子丈という者がいて、釣りの最中刀を釣り上げ所持していたが、魚を切るとまないたまで切り込むほど切れるので、それから秘蔵していたところ、その子はその刀で怪我をしそのために死んだので、腹立たしさのあまり古場野という野原の真石を切ったところ、真つ二つに切り

割つたので恐しくなり、元の海中に投げ捨ててしまった。ところが、夜な夜な海中で光って見えるので、世之主の城から使者を遣わし、取り寄せて秘蔵しておいた。」という意味のことが「世之主由緒書」に記されているが、海中から刀を釣り上げたとか、海中へ投げ捨てた刀が夜な夜な光って見えるとか、ということは現代の常識ではとうてい理解できないことである。

これはおそらく、海からの来訪者との交渉があったことを物語るものではなからうか。海からの来訪者とは、つまり倭寇である。昔「沖繩本島、東海岸の石川村海岸に倭寇があつて、伊波の按司との間に大激戦があつた。日本人（倭寇）はその船に積んであつた金銀、財宝をこごとく海中に投じ全員自殺したという。現に石川村には日本人が投げ捨てた金塊を拾い上げ、金持ちになつた者もいるという口碑がある。（倭寇史蹟の研究）」ということなど考え合わせると倭寇との出会いのあつたことが想像される。

倭寇とは、十三世紀から十六世紀にかけ朝鮮や中国沿岸をあらした、日本人を中心とした海寇集団に対する朝鮮や中国側からの呼称である。

もしばしば倭寇があつた。宮古島の「殿の時代」というのは、倭寇の連中が一時占領していた時代のことである。慶良間や伊平屋島に倭寇の口碑があり、一時もしくは永久的に占領し、根拠地としたのではなからうか。

倭寇についての文献はほとんどなく、そのことについては史跡や伝説、習俗、行事などについて考察するよりほかに方法がないと言われている。

稲村賢敷著「琉球諸島における倭寇史蹟の研究」の中で、童名「ガーラ」は倭寇の子孫であると述べた中で、次のようなことが記されている。「そのころ中国では倭寇の隊長のことを『日本甲螺』といつて恐れていたが、『甲螺』というのは『頭目』すなわち『カシラ』のことで、この『カシラ』の音を漢字にあてて『甲螺』と書き、訛つて『コーラ』というのだろう。南方諸島で日本人のことを『ゴーレー人』というのは、『頭目』に対し『カシラ』ということから起こり、しだいに日本人全体の名称となつたのだろう」と述べた後で、沖永良部の俗謡「後蘭孫八が積み上がった城、イラブ三十祝女ぬ遊び所」を取り上げ「後蘭孫八と漢字で書いてあるので発音が分らないが『ゴーレー』又は「ガーラ」に近い音だから、

観応元年（一二三〇）以後文和四年（一二三五）我が辺民高麗を侵す。天授元年（一二三五）倭寇激しく、この年高麗より使きたり、禁庄を請うということも起つている。

このように初めのころは、主として高麗を侵していたのであるが、対象としたのは米穀と人民で、被虜一人につき綿布十匹が相場であつた。後には北支、中支、南支にわたつて、その沿岸を侵したようである。

倭寇の根拠地は長崎県の五島や、佐賀県の松浦、鹿児島県の坊津などが中心であつたと言われ、主に東支那海を舞台に活躍した。

十六世紀ごろの倭寇の主体は中国人で、日本人は一割程度だった。密貿易を主目的とした海上暴力集団で、琉球は中継基地として利用された。憾がある。

琉球では尚清王が死んだ翌年、嘉靖三十五年（一五五六）夏、尚元王が即位して間もなく、中国の江浙（江蘇省・浙江省）を襲つて撃退された倭寇が那覇港左岸のヤラザ森城の下に現れ、尚元王はたちまちこれを撃退したということがある。

琉球における倭寇は、これ一度ではなかつた。離島に

孫八は明らかに日本人である」と述べている。

後蘭が地名で「ゴラン」（グラル）と訓んでいることが分からないまま想像して書いているようだが、童名「ガーラ」は倭寇の子孫であるということを強調し、倭寇とのかかわりから孫八が日本人であることを立証しようというのであろう。

「世之主由緒書」に「後蘭孫八、屋者眞三郎二人共長九尺余りの大男にて候由……島人は琉球人にては孫八、マサバルなどと名乗申さず、多分は日本よりの落人にて、世之主へ奉公仕居為申者共にては無御座候哉……」とあることから、孫八らが日本人であることを主張しているものといえる。

これを裏書きするかのようには、玉江末駒編「沖永良部史稿本」に「越山の頂上に俗に『こうじんどう』と称する土を盛りたる古墳二基あり、こうじんは方言、ぐじん」と同じく土石を積み盛ることなり。明治二十五年の頃これを発掘したる者あり。その言を聞くに最初饅頭形に積みたる石を取除きしに黒石を積み合せたる跡あり、これが下には白砂を敷きその中に少量の白骨と黄銅の破片ありしと、他の一基はまだ原形のままにてその上に雑木

茂れり。思うに御陵の形を横したるもの如し。これあるは孫八等の主君の墳墓にあらざるか」とあつて、孫八らには世之主に仕える以前に別の主君のあつたことを暗示しているが、いずれにしても孫八ら世之主の四天王と言われる人々は同時に島にきたのではなく、個々にきて住みついたものではなからうかと思われる。

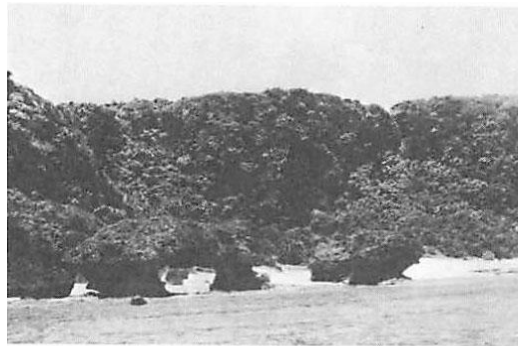
東支那海を、長い日数かけて行き来していた彼ら倭寇が目的を持って立ち寄ったり、あるいは難船漂着したりして島にき、帰りの船を待ちながらその機会もなく、不本意ながら島に住みついた者もいたであろう。

倭寇史跡には松明を点じ、遠く沖を通る僚船(倭寇船)に合図する「灯つけ原」「灯ヤ原」などと言われる遺跡があるとされているが、根折の「チイヤ原」や畦布の「灯ヤ原」や「灯つけ原」などはそれに当たるものではないか。

畦布の湾川浜の西側に「ドヌシ」と呼ばれている小地名があるが、これは「何の瀬」のなまり音であるという。昔ここに和船が度々入港したが、そのとき「何の瀬に舟を繋ぐか」と言っていたことから頭音の「何の瀬」が地名になったものとの口碑がある。一説にはここに緞子を乾

したので緞子(どんす)がなまって「ドヌシ」となったのだとの説もある。和船といい、緞子といい、何か倭寇とかかわりがあるような気がするが、詳しい口碑は残っていない。

屋久島、口永良部島に「バンドカ」(番所)という所があつて倭寇の見張り所であつたと言われているが、上城や田皆のバンド(万当)も番所からきたものではなからうか。案の定、上城のバンドは攻めてくる船の見張りをする番所であつたとの口碑があるが、船とは倭寇船であろう。



畦布湾川浜西側にあるドヌジ